九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

高校生の生徒文化と学校経営(I)

松原, 治郎
東京大学

耳塚, 寛明
東京大学大学院

渡部, 真
東京大学大学院

武内, 清
武蔵大学

他

https://hdl.handle.net/2324/10639

出版情報：日本教育社会学会大会発表要旨集録. 32, pp.134-143, 1980-09-20. The Japan society of Educational Sociology
バージョン：
権利関係：本文データは学協会の許諾に基づきCiNiiから複製したものである

The Japan Society of Educational Sociology

高校生の生徒文化と学校経営(I)

○松原治郎(東京大学)　○武内　清(武蔵大学)　岩木秀夫(東京大学)
○耳塚寛明(東京大学大学院)　○苅谷剛彦(東京大学大学院)　○樋田大二郎(東京大学大学院)
渡部　真(東京大学大学院)　吉本圭一(東京大学大学院)　河上婦志子(お茶水女子大学研究生)

発表の構成

1. 問題の設定　2. 調査の概要
3. 対象校のプロフィール
4. 学校の地位と生徒文化
5. 学校経営と生徒文化
6. 教師のパースペクティブと生徒文化
7. 学校・教師・生徒文化

1. 問題の設定

わが国におけるいわゆる生徒文化研究は、これまで、高校内部に「遊び下位文化」「反学校下位文化」を含む多様な生徒文化が存在すること、さらに大学進学率に対応した形で生徒文化の存在形態に学校差があることを明らかにしてきた。そうした発見は、高校教育への接近方法としての生徒文化論的アプローチの有効性を、明確に示しているといってよい。だが一方で、その学校と生徒文化との関連をとらえる媒介項についての検討がこれまでの研究では不充分であり、とくに高校の学校経営の特質を考慮に入れた研究はあまり見られなかった。本研究はこうした従来の生徒文化研究の成果をふまえつつ、そこに欠如していた学校経営の一側面、すなわち学校の行なう生徒の学習と行動の組織構造と生徒文化の力学を、実証的に明らかにしようとするものである。

従来の生徒文化研究は高校教育研究の一アプローチとして大きな成果を収めてきたことは間違いない。しかしながら、以下の問題点が未解決のままであることを指摘しないわけにはいかない。第一に「生徒文化」というタームの曖昧さである。生徒役割との関連、「文化概念」といった観点から「生徒文化」概念をとらえ直す必要がある。本研究では広義に、生徒が学校教育を受ける過程で形成した生徒特有の意識や行動様式をさして、生徒文化と定義する。

第二の問題点は調査研究の方法に関わる問題である。従来の研究の多くは生徒に対する質問紙からの情報に専ら依存している。そこから得られる生徒の意識・行動様式の類型は研究者の推理にすぎず、現実から乖離している可能性がある。今後、究極的には、観察、インタヴューと質問紙を併用する必要がある。本研究では、生徒文化に関する情報は主として質問紙に依存しているものの、教師のインタヴューの中で生徒の特徴を問うたこと、質問の作成に際して生徒の現実の意識をできるだけ浮かび上がらせるよう努めたことにより、質問紙法の限界をカバーしようとした。

第三の問題は、従来の研究の力点が類型の析出におかれていたことである。すなわち多様な生徒文化の存在形態を記述する段階にとどまっており、なぜ、どのように分化するのかを十分に説明していない。とりわけ、学校がどのように生徒の学習と行動を組織しているかという「組織構造」、ミクロレベルの教師＝生徒関係など、学校内変数と生徒文化の関連は十分に明らかにされぬままでいる。

(本研究は昭和54年度文部省科学研究費、一般研究(C)にもとづくものである。)

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

わが国の高校教育研究においては、一部の先駆的研究を除き、生徒文化と学校経営（生徒の学習と行動の組織化）の関連をとりあつかった研究はきわめて限定されている。同一の学校階層上の地位に属する高校はそのランクにある限りで一括して扱われ、個々の高校のもつ文脈（King, R のいう organizational context）、学校の行なう学習と行動の組織構造の差異は捨象されるのが普通であった。さらに、日常の non-organizational なレベルにおける教師＝生徒関係が生徒文化の分化過程に与える影響を実証的に明らかにした研究は、これまで皆無といってよい。

本研究は、この点に焦点をあわせる。すなわち、学校階層上の地位（文脈の一側面）および生徒の属性との関連において生徒文化をとらえる従来の枠組に、学校経営（学習と行動の組織）、教師のパースペクティブ（日常的に教師が生徒をみる時のパースペクティブ）という二つの観点を挿入する（図1）。

設定した分析課題は次のとおりである。

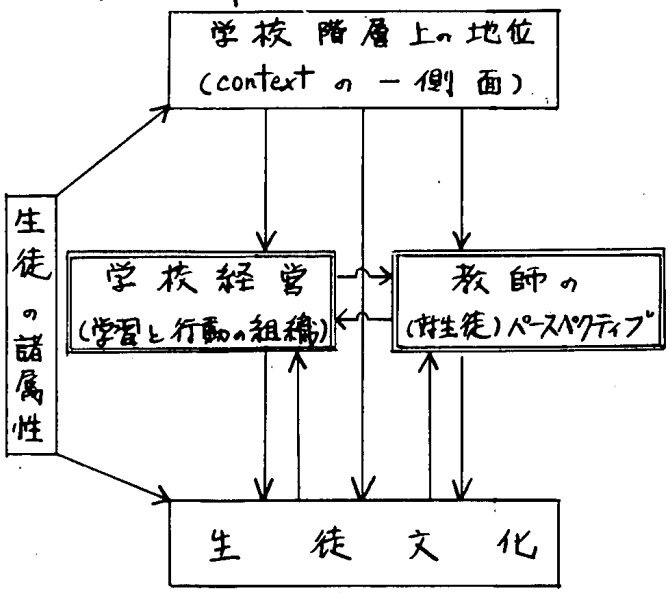
i) 学校階層上の地位と生徒文化には、いかなる関連があるか。

ii) 学校階層上の地位と学校経営には、いかなる関連があるか。

iii) 学校階層上の地位をコントロールした時、学校経営と生徒文化にはいかなる関連があるか（intra-contexual な学校経営の効果）。

iv) 学校階層上の地位は、教師の対生徒パースペクティブをどう規定しているか。また、学校階層上の地位をコントロールした時、教師のパースペクティブは、学校経営を経由して、乃至、独自に、生徒文化といかなる関連があるか。

図1　調査研究の枠組



2. 調査の概要

昭和54年11～12月に以下の調査を行なった。

(1) 生徒対象質問紙調査

対象・3都県21公立高校に在学する2年生。今回はそのうち、2県（A県、T県）11校計1375ケースを分析対象とした。

方法・各学級における質問紙による自記式調査

(2) 教師対象質問紙調査

対象・(1)の対象校に勤務する本務教員。今回はそのうち11校計604ケースを分析対象とした。

方法・留置法による質問紙調査

内容・日常的な対生徒関係において遭遇すると思われる様々な生徒のタイプをあげ、それぞれに対し「好ましい一問題だと思う」を4段階で評定してもらった。

(3) 経営に関する調査

対象・上記対象校毎に、校長、教頭、教務主任、進路指導主任、生徒指導主任、学年主任計6名。

方法・インタヴューマニュアルによる聴き取り調査、および諸文書の分析。

本研究の集計に際しては、東京大学大型計算機センター，OS7(HITAC 8800/8700) を使用した。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

3. 対象校のプロフィール

		学区1		学区2	学区3
グループA	学校（課程）	A1高校（普）		T1高校（普）	T4高校（普）
	1)創立，前身	M.33 旧制中学		M.18 旧制中学	M.31 旧制中学
	2)規模 （うち男子比）	10学級/1学年 (75.6%)		8学級 (63.7)	8学級 (70.6)
	3)進学希望率（国公立4年制）	93.6%（82.4%）		100.0 (97.6)	99.2 (97.6)
	4)就職希望率	6.4%		0.0	0.8
	5)中学時の成績平均	8.21		8.10	8.31
グループB	学校（課程）	A2高校（普）	A3高校（普）	T2高校（普）	T5高校（普）
	1)創立	S.39	S.49	S.49	S.49
	2)規模 （男子比）	10学級 (54.6)	8学級 (59.5)	9学級 (62.5)	6学級 (54.4)
	3)進学希望率（国公立4年制）	87.2 (48.8)	78.4 (41.6)	94.4 (57.6)	98.4 (84.0)
	4)就職希望率	12.8	20.8	5.6	0.8
	5)中学時成績平均	7.46	6.58	6.61	7.42
グループC	学校（課程）	A4高校（商）	A5高校（工）	T3高校（商）	T6高校（工）
	1)創立，前身	M.38 商業補習学校	T.2 工業徒弟学校	M.30 簡易商業学校	M.27 工芸学校
	2)規模 （男子比）	10学級 (70.0)	9学級 (94.9)	8学級 (74.6)	8学級 (81.6)
	3)進学希望率（国公立4年制）	20.8 (4.0)	27.2 (4.8)	35.2 (5.6)	36.8 (8.0)
	4)就職希望率	76.8	72.8	61.6	62.4
	5)中学時成績平均	5.20	5.09	5.19	5.10

〔注〕項目 3),4),5) は、質問紙調査サンプルにもとづく。5)は9段階評価、上位ほど大きな数値。

4. 学校の地位と生徒文化

A、生徒文化の各側面と尺度化の手続き

本研究では、生徒文化を(1)勉強への関与、(2)勉強への意味付与，(3)教師への親密度、(4)学校への適応度，(5)ユースカルチャーへの志向の5つの側面から分析する。各側面のそれぞれについて生徒用質問紙から関連質問事項を選択，林の数量化理論第Ⅲ類を適用し，その第Ⅰ根，第Ⅱ根を分析尺度として用いた。

尺度名およびその尺度を構成するカテゴリーとそのウェイトは次ページ以後に示したとおりである。

なおそれぞれの尺度の性格（何を基準とした尺度であるか）についてここで簡単な説明をしておく。以下 a.尺度が測定する内容，b.尺度のマイナス(−)・プラス(+)の領域を仕分ける基準，c.マイナス(−)・プラス(+)の方向を特質づけるカテゴリーの例、の順番に説明する。

(1)勉強への関与

a.勉強についての意識・行動の両面にわたる全般的な関与

b.(−)肯定的関与、(+)否定的関与

c.(+) 家でもきちんと勉強する

(−) 五科の授業に充実感がある

(−) 高校での勉強は興味・関心にあう

(+) むずかしすぎてついていけない

(+) 落第しない程度の成績をとっていればいい

(2)勉強への意味付与

a.勉強をどのように解釈し位置づけている

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

か

b.(−)本来的、(+)打算的

c.(−)勉強したことが身につく

(−)勉強は受験に役立つだけでない

(+)勉強は将来の生活に役立たない

(+)勉強は受験に役立つだけだ

(3)教師への親密度

a.生徒の意識のなかでの教師＝生徒関係の親密さ

b.(−)親密度高い、(+)親密度低い

c.(−)授業外での先生との接触に満足

(−)先生に親しみを感じる

(−)認めたり、期待してくれる先生がいる

(+)生徒の意見を大事にする先生いない

(+)先生に親しみを感じない

(4)適応度（疎外感）

a.全体としての学校への適応度

b.(−)適応度高い、(+)適応度低い

c.(−)授業外での先生との接触に満足

(−)学校内の生活が楽しい

(+)学校生活楽しくない

(+)学校での生活にはりあいを感じない

(5)ユースカルチャーへの志向

※ユースカルチャーへの志向は第Ⅰ根と第Ⅱ根とから二つの尺度を用いる。

第Ⅰ根、非行度

a.非行的ユースカルチャーを志向する度合

b.(−)非行的、(+)非・非行的

c.(−)喫煙に関心がある

(−)パーマ・リーゼントに関心がある

(−)オートバイに関心がある

(+)ニューミュージック・ロック・ポップスに関心がない

(+)飲酒関心がない

第Ⅱ根、アイデンティティ探究への関心度

a.アイデンティティ探究への関心が強いユースカルチャーを志向する度合

b.(−)関心高い、(+)関心低い

c.(−)文学・哲学に関心がある

(−)ひとり旅に関心がある

(−)異性に関心がある

(+)ひとり旅に関心がない

(+)異性に関心がない

(+)文学・哲学に関心がない

表−1

勉強への関与 各項目のカテゴリーウェート（数量化第五類・第1根）	固有値 0.147 相関係数 0.383
家でもきちんと勉強する	−3.44
五科の授業に充実感がある	−2.17
試験後勉強したことをすぐ忘れる	−2.04
先生の授業を熱心に聞いている方だ	−1.73
授業でわからない点をそのままにしない	−1.68
高校での勉強は興味・関心にあう	−1.43
どうしてこんなことまで勉強するのかと疑問に思うもの	−1.25
勉強は大切なものが身についていると思う	−1.05
早すぎてついていけない授業が多い	−1.04
中略	
今の自分の成績に満足している	0.64
授業でわからない点をそのままにする	0.85
先生の授業を熱心に聞いている方でない	1.03
五科の授業に充実感がない	1.12
高校での勉強は興味・関心にあわない	1.16
授業がきっかけでさらに知りたくなる	1.17
先生や親の期待にこたえるため勉強しようと思わない	1.75
落第しない程度の成績をとっていればよい	1.96
むずかしすぎてついていけない教科書多い	2.22

表−2

勉強への意味付与 各項目のカテゴリーウェイト（数量化第五類第1根）	固有値 0.123 相関係数 0.351
勉強したことが身につく	−2.68
勉強は受験に役立つだけでない	−2.66
なぜ勉強するのかわかる	−2.40
学校の勉強は暗記中心ではない	−2.28
学校の勉強は将来役に立つ	−2.18
試験で本当の能力がはかれる	−2.03
試験後も勉強したことを残る	−1.86
勉強は自分の興味関心にあっている	−1.54
授業がきっかけでもっと詳しく知りたくなる	−0.45
中略	
試験後勉強したことすぐ忘れる	0.46
いくら勉強しても大切なもの身につかない	0.50
急いで成績の悪い者が将来損するのは当然でない	0.50
授業がきっかけでもっと知りたくならない	0.63
努力をすれば誰でもよい成績をとれるわけではない	0.94
なぜこんなことまで勉強しなければならないか疑問だ	0.98
高校での勉強は自分の興味関心にあわない	1.24
高校での勉強は受験に役立つだけだ	1.41
学校の勉強は将来の生活に役立たない	1.60

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

表－3

教師への親密度 各項目のカテゴリーウェイト （数量化第Ⅲ類・第1根）	固有値 0.299 相関係数 0.597
授業外での先生との接触に満足	−2.48
先生に親しみを感じる	−1.87
認めたり，期待してくれる先生いる	−1.38
道で会うと声をかけてくる先生いる	−1.01
先生の授業を熱心に聞く	−0.85
生徒の意見を大事にする先生いる	−0.66
先生や親の期待に応えるため勉強する	−0.23
先生や親の期待に応えるため勉強しない	0.41
先生の授業熱心に聞かない	0.50
授業外での先生との接触に不満足	0.62
生徒の意見を大事にする先生いない	0.83
認めたり期待してくれる先生いない	0.95
先生に親しみ感じない	0.99
生徒の意見を大事にする先生いない	1.46

表－4

適応度（疎外感） 各項目のカテゴリーウェイト （数量化Ⅲ類・第1根）	固有値 0.253 相関係数 0.503
授業以外での先生との接触に満足	−1.87
学校内の生活が楽しい	−1.76
先生に親しみを感じる	−1.49
学校での生活にはりあいを感じる	−1.44
学校を休みたい気持にはならない	−1.42
学校のやり方に不満を感じない	−1.21
他の高校にかわりたいと思わない	−1.13
この学校の生徒であることに誇り	−1.03
学校生活楽しい	−0.71
早く社会に出たいと思わない	−0.56
今いるクラスにとけこめる	−0.54
学校のやり方に不満を感じる	0.42
授業以外での先生との接触に不満足	0.46
早く社会に出て働きたい	0.52
学校の外での生活の方が楽しい	0.56
学校を休みたい気持になる	0.71
先生に親しみを感じない	0.79
できることなら他の高校にかわりたい	1.10
この学校の生徒であることに誇りでない	1.10
今いるクラスにとけこめない	1.17
学校での生活にはりあいを感じない	1.21
学校生活楽しくない	1.97

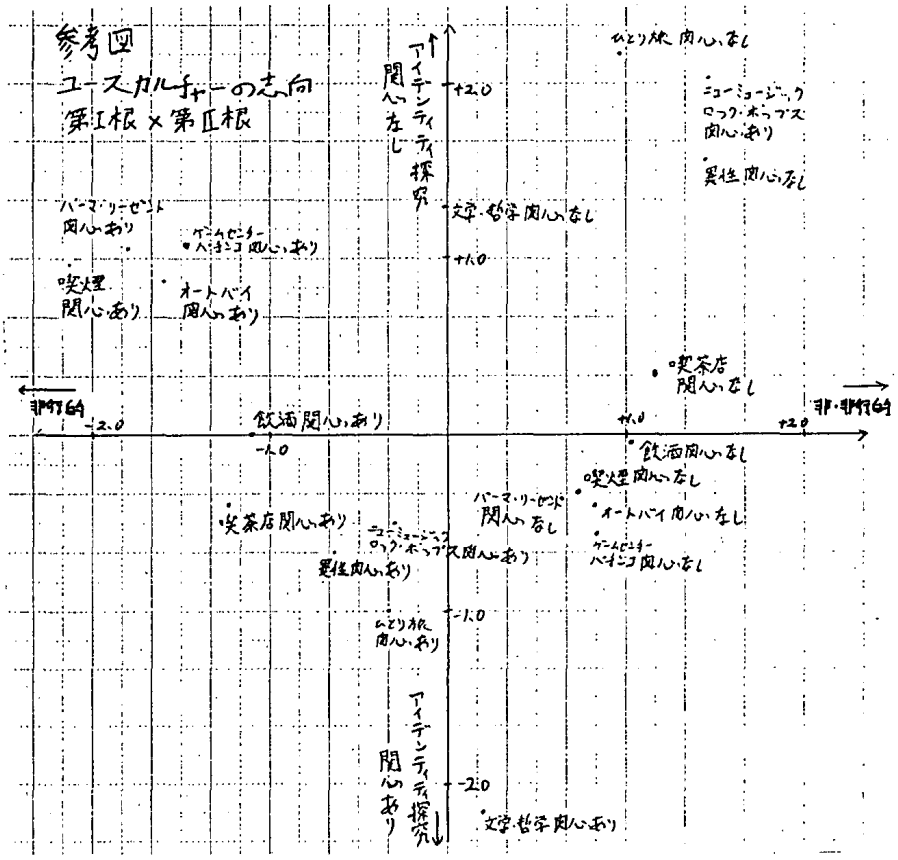
表－5(a)

ユースカルチャーの志向　1、非行度 各項目のカテゴリーウェイト （数量化第Ⅲ類 第1根）	固有値 0.333 相関係数 0.577
喫煙に関心がある	−2.19
パーマ・リーゼントに関心がある	−1.79
オートバイに関心がある	−1.60
ゲームセンター・パチンコに関心がある	−1.47
飲酒に関心がある	−1.45
喫茶店に関心がある	−1.27
異性に関心がある	−0.62
ひとり旅に関心がある	−0.33
ニューミュージックに関心がある	−0.31
文学・哲学関心ない	−0.01
文学・哲学関心がある	0.02
パーマ・リーゼント関心がない	0.64
喫煙関心がない	0.73
ゲームセンター・パチンコ関心がない	0.83
オートバイ関心がない	0.84
ひとり旅関心がない	0.96
飲酒関心がない	1.03
喫茶店関心がない	1.16
異性関心がない	1.46
ニューミュージック関心がない	1.48

表－5(b)

ユースカルチャーの志向　2、アイデンティティ探究への関心 各項目のカテゴリーウェイト （数量化第Ⅲ類第2根）	固有値 0.127 相関係数 0.357
文学・哲学関心がある	−2.21
ひとり旅関心がある	−0.98
異性に関心がある	−0.67
ゲームセンター・パチンコ関心がない	−0.62
ニューミュージック・ポップス関心がある	−0.52
オートバイ関心がない	−0.43
喫茶店関心がある	−0.40
パーマ・リーゼント関心がない	−0.38
喫煙関心がない	−0.32
飲酒関心がない	−0.05
飲酒関心がある	0.07
喫茶店関心がない	0.37
オートバイ関心がある	0.85
喫煙関心がある	0.99
パーマ・リーゼント関心がある	1.07
ゲームセンター・パチンコ関心がある	1.11
文学・哲学関心がない	1.32
異性に関心がない	1.58
ニューミュージック・ポップス関心がない	2.38
ひとり旅関心がない	2.84

参考図
ユースカルチャーの志向
第Ⅰ根×第Ⅱ根



NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

B、学校階層上の地位と生徒文化

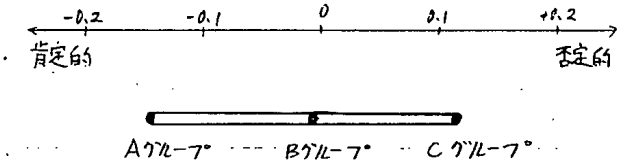
ここでは、学校階層上の地位と生徒文化の諸側面との関連について考察する。学校階層上の地位（A～Cグループ）をグループ変数とし、各尺度上におけるサンプルスコア平均点の布置を見ることにより、両者の関連を明らかにしたい。

近年の研究で学校階層上の地位と生徒文化の間に強い関連のあることが示唆されてきた。本研究では生徒文化をトータルな類型としてとらえるのではなく、まずは分析的に五つの側面に分け、各側面と学校階層上の地位との関連を明らかにする。

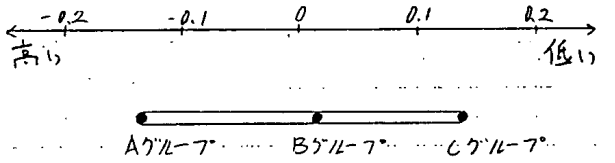
図2から図5は、「勉強への関与」、「教師への親密度」、「学校への適応度」、「ユースカルチャーへの志向」の4つの側面について各グループのサンプルスコア平均点を図示したものである。これらの図は従来の諸研究が明らかにしてきた知見と、ほぼ同じ傾向を示している。すなわち学校階層上の地位が最も高いAグループの学校の生徒はB・Cグループの生徒よりも「勉強への関与」が肯定的で「教師への親密度」「学校への適応度」がともに高く，非非行的でアイデンティティ探究への関心の高いユースカルチャーを志向している。これにたいし、学校階層上の地位が最も低いCグループの学校の生徒たちはそれぞれの尺度でAグループの学校の生徒たちと逆の方向に位置し，またBグループの学校の生徒たちはA・C両者のほぼ中間に位置している。

しかし図6に示したとおり「勉強への意味付与」の側面ではCグループの生徒たちがA・Bグループより本来的な意味を付与している。このことは普通課程(A,B)と職業課程(C)の差異に起因すると思われる。

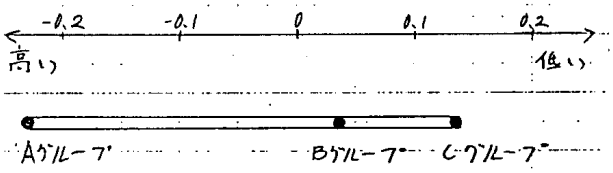
〔図-2 勉強への関与：学校地位別〕



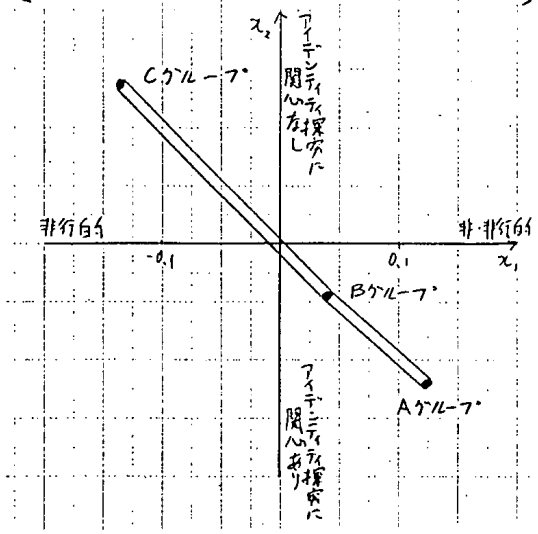
〔図-3 教師への親密度：学校地位別〕



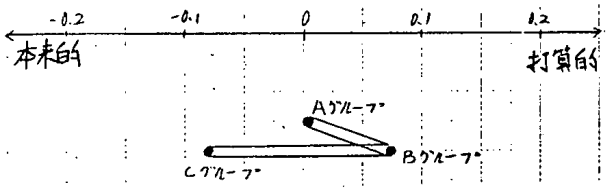
〔図-4 適応度(疎外感)：学校地位別〕



〔図-5 ユースカルチャーへの志向：学校地位別〕



〔図-6 勉強への意味付与：学校地位別〕



以上から、学校階層上の地位と生徒文化の各側面との間には、概ね強い関連があることが明らかとなった。では、ここで同一のグループとして分析を行なった各階層グループ（A～C）の中に，学校による生徒文化の差異は存在しないのか、特に学校経営との関連で、次にこの点の検討を行なう。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

5. 学校経営と生徒文化

すでに見たように学校階層上の地位と生徒文化との間には強い関連がある。そして学校階層上の地位が高いほど、生徒は学校の諸側面により肯定的な関与を示す傾向が認められた。学校階層上の地位は生徒文化を規定する主要な要因の一つであると見ることができる。

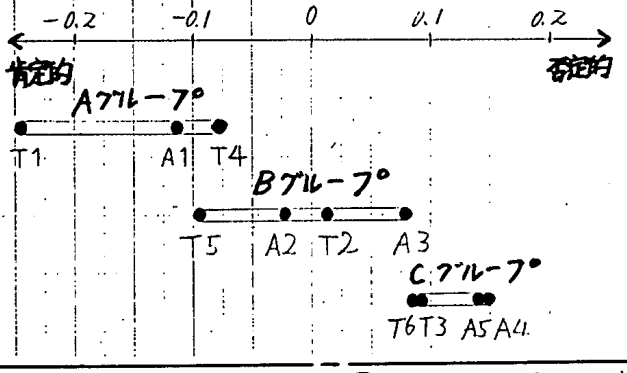
それでは学校間にはどのような差異があるのだろうか。ここでは個々の学校を分析単位として、学校階層（3つのグループ）ごとに生徒文化の比較を行なう。学校階層上の地位をコントロールした後に残る学校間の差異を見る。それによって階層上の地位以外に生徒文化を規定している要因の存在を確認することがここでの主たる目的である。

〔なお、以下紹介する学校間の差異が何によって規定されているのかという問題は、発表当日配布する各学校の経営上のプロフィールに関する資料を交えた上で考察する。従って、ここでは、学校間の差異を記述することに留める。〕

(1)勉強への関与

まず初めに勉強への関与について見る(図7)。すでに図2で見たように、勉強への関与は学校階層上の地位によって大きな差異があった。

〔図7 勉強への関与：学校別〕

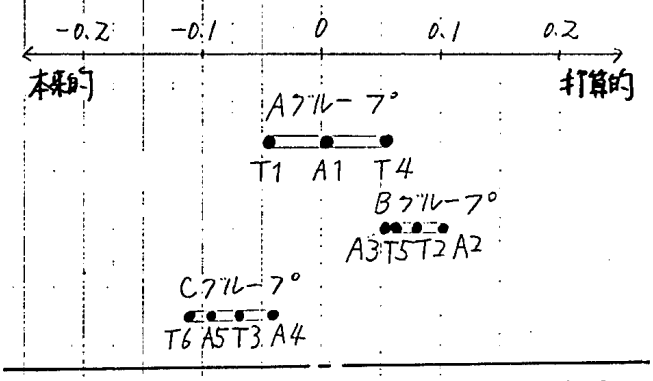


しかし図7にみるように同一グループ内にも学校間の差異が存在する。学校階層上の地位がもっとも高いAグループについて見ると、T1とT4とはともに、進学希望率、国公立大学進学希望率において概ね同じ数値を示すにもかかわらず、勉強への関与には大きな差がみられる。また、Bグループ内にも、Cグループ内にも学校間の差異がみられる。さらにグループを越えてみると、BグループのT5はAグループのT4と、CグループのT6，T3はBグループのA3とほぼ同じ値を示す。このように学校階層上の地位によっては説明が困難な事例が見られることは注目に値する。

(2)勉強への意味付与

次に勉強への意味付与の違いについてみる(図8)。

〔図8 勉強への意味付与：学校別〕



ここで注目に値するのはT1とT4との差異である。T1は勉強について受験に役立つだけではない本来的な意味を見出しているのに対し、T4では、受験に役立つだけだという割り切った打算的な意味しか見出していない。ここにはおそらく、学校経営上ないし教師のパースペクティブの上での差異が予想される。

(3)教師への親密度

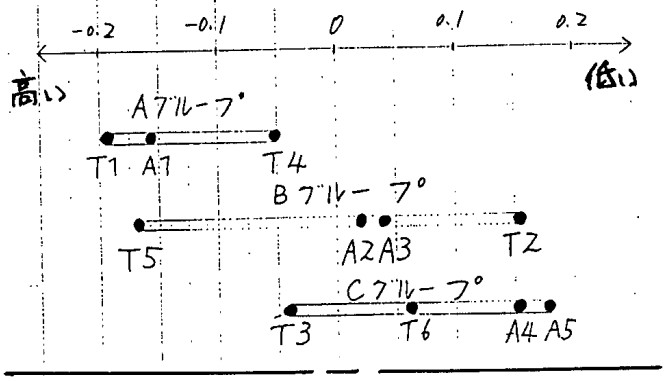
次に教師への親密度についてみる(図9)。Aグループについてみるとここでは T1とT4との間の差異が目につく。またBグループではT5とT2との間に、CグループにおいてはT6とA5との間にそれぞれ大きな差がある。さらに目を引くのは、BグループのT5はAグループのT4よりも、CグループのT3，T6はBグルー

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

プのT2よりもそれぞれ高い親密度を示していることである。これは学校階層上の地位がそのまま教師への親密度を規定するのではなく、それ以外の要因によって逆転する場合があることを示している。

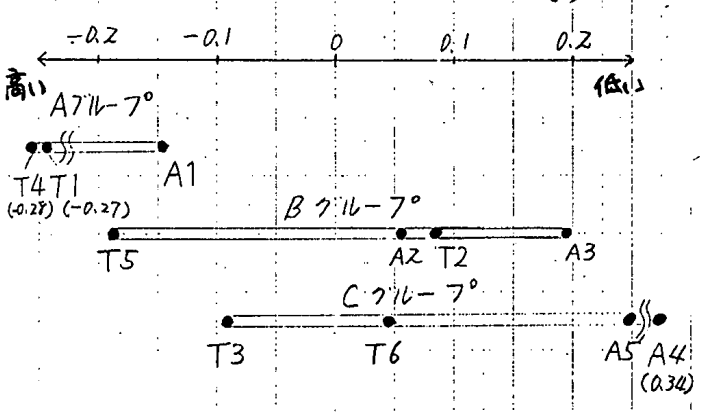
[図9 教師への親密度：学校別]



(4)学校への適応度

次に全般的な学校への適応度について見る(図10)。

[図10 適応度(疎外感)：学校別]

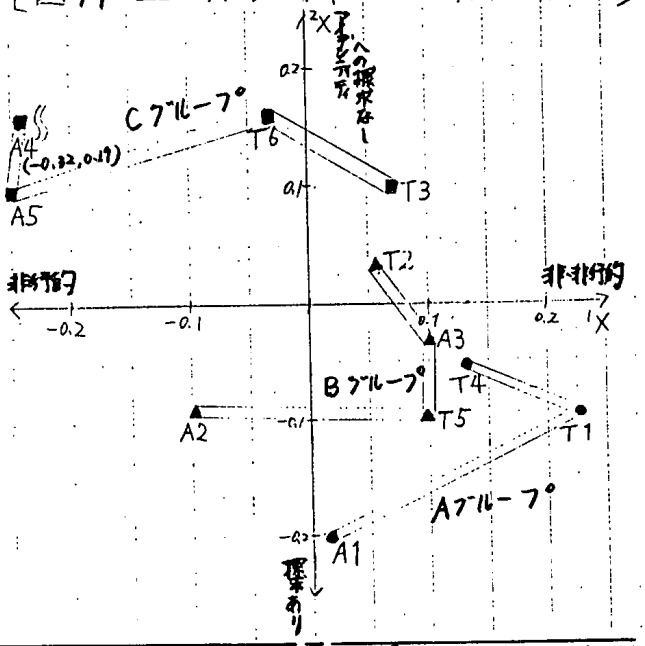


学校への適応度については、すでに図4で見たように、学校階層上の地位と強い関連があった。しかし、図10に示されているように学校間にはかなりの差異がある。Aグループでは、T4,T1とA1との間に差異がみられる。Bグループについては、T5と他の3校との間に大きな差異がある。Cグループでも、T3,T6とA5,A4との間に大きな差がある。さらにBグループのT5はAグループのA1 ほぼ同じ値を示し、CグループのT3,T6はBグループのA3よりも高い適応度を示している。このように同一階層の学校間に適応度の顕著な差異がみられること、学校階層上の地位を越えた差異がみられることは、これまでの知見では説明できない事実である。学校階層上の地位以外の要因についての考察が要請されるところである。

(5)ユースカルチャーへの志向

最後にユースカルチャーへの志向について見る(図11)。

[図11 ユースカルチャーへの志向：学校別]



まずAグループについて見ると、A1はT1,T4に比べ非行的でアイデンティティへの探求に向っていることがわかる。次にBグループでは、A2は他の3校に比べ非行的傾向が強い。さらに、A2とT5は、A3,T2に比べ、アイデンティティへの探求に向っている。最後にCグループについてみると、A4,A5はT3,T6に比べ非行的な方向に向っているのがわかる。このようにユースカルチャーへの志向においても、同一グループ内に学校間の差異があると言うことができる。

(6)まとめ

ここでは生徒文化のいくつかの側面について、学校階層内に学校間の差異がみられるこ

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

と、場合によっては、階層上の地位を逆転する違いがあることをみてきた。これらの事実は学校階層上の地位によって生徒文化が決定されるという知見を越えるものである。そして、これらの差違を説明する鍵は、各学校の経営上の特色および各校の教師の対生徒パースペクティブの特徴に求めることができる。

6. 教師のパースペクティブと生徒文化

ここでは、教師の対生徒パースペクティブと、生徒文化、学校階層上の地位、学校経営の関連を明らかにする。

本研究では、教師対象質問紙調査（有効回収604）により、次のようにして教師の対生徒パースペクティブをとらえた。まず、「自分で納得のいかない校則には従わない生徒」、「教科書を自分でどんどん進む生徒」など、日常的な対生徒関係において遭遇すると思われる生徒のタイプを35あげ、そのそれぞれについて、「好ましいと思う」から「問題だと思う」まで4ポイントスケールで評定させた。

表6 教師のパースペクティブ：因子分析 バリマックス回転の結果

因子	固有値 / 寄与率	変数	構造ベクトル
(I) 従順性	3.78 / 40.2%	成績は平均的だが授業中おとなしく助かる	0.62
		試験の勉強はまじめにやるが消極的	0.57
		とりたてて目立つ面はなく校則違反もしない	0.55
		従順で素直だが幼稚さの残っている	0.49
		教えられたことを疑問をもたずに覚える	0.43
(II) 脱生徒役割	2.20 / 23.3%	校則に違反することが多いが生活力は旺盛	0.60
		学校からはみ出しているが意欲がある	0.46
		勉強はできないが生活力が旺盛	0.39
		自分で納得のいかない校則には従わない	0.36
(III) 授業中の逸脱	1.44 / 15.3%	勉強はできるが授業中私語が多い	0.57
		授業中内職をしているが試験でよい点をとる	0.56
		夜遅くまで勉強しているので授業中居眠りをする	0.55
		部活動に熱心な余り授業中居眠りをする	0.53
(IV) 政治的早熟	0.89 / 9.5%	学校に対して不満や意見を堂々と主張する	0.59
		政治的・社会的関心がすすんでいる	0.45
		ほかの生徒の校則違反をとがめる	0.33
		自分を一人前の大人だと思っている	0.32
(V) 自己主張	0.65 / 6.9%	授業中納得するまで自分の意見をいいあらそう	0.65
		授業中先生をやりこめる	0.53
		HRで少数派でも自分の意見を最後まで主張する	0.38
(VI) 知的早熟	0.46 / 4.9%	ほとんどの科目は平均だがとびぬけてできる科目がある	0.51
		教科書よりも参考書に興味を示す	0.48
		教科書を自分でどんどん進む	0.45

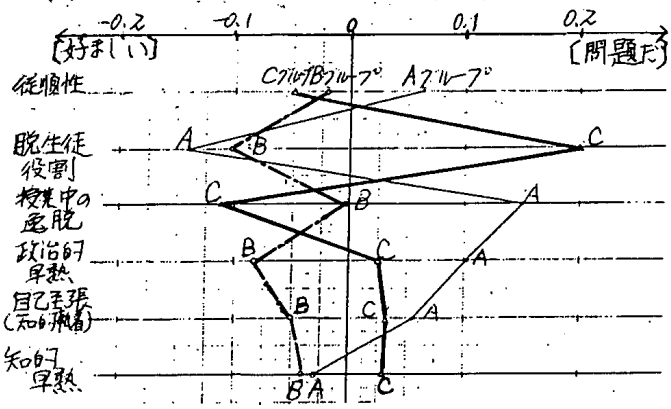
表7 教師のパースペクティブ：学校別因子得点 上段 mean 下段 (S.D.)

	F1 従順性	F2 脱生徒役割	F3 授業中の逸脱	F4 政治的早熟	F5 自己主張	F6 知的早熟	N
A1	−.006 (.868)	−.071 (.781)	.125 (.832)	−.072 (.650)	.026 (.686)	−.126 (.740)	57
A2	.191 (.882)	−.197 (.677)	−.281 (.901)	−.131 (.755)	−.260 (.707)	−.207 (.750)	56
A3	−.136 (.968)	.007 (.856)	.279 (.897)	−.132 (.829)	−.041 (.874)	.125 (.780)	46
A4	−.013 (.880)	.044 (.809)	.002 (.850)	.036 (.765)	−.062 (.746)	−.060 (.800)	64
A5	−.217 (.829)	.315 (.739)	−.006 (.839)	−.367 (.722)	−.020 (.862)	.027 (.684)	63
T1	.121 (.858)	−.317 (.927)	.189 (.796)	.109 (.824)	.107 (.798)	−.069 (.749)	39
T2	−.094 (.766)	−.116 (.689)	−.085 (.806)	−.066 (.690)	.252 (.740)	−.045 (.674)	42
T3	.015 (.929)	.186 (.955)	−.091 (.678)	.179 (.762)	.228 (.878)	.119 (.870)	43
T4	.103 (.774)	−.075 (.554)	.157 (.908)	.324 (.814)	.046 (.728)	.136 (.768)	43
T5	−.132 (.736)	−.082 (.712)	.172 (.851)	.038 (.805)	−.108 (.747)	.018 (.733)	33
T6	.032 (.884)	.247 (.739)	−.325 (.739)	.272 (.749)	.048 (.729)	.012 (.699)	70
A県	−.036 (.887)	.028 (.786)	.014 (.874)	−.134 (.751)	−.070 (.777)	−.053 (.754)	286
T県	.014 (.833)	.008 (.790)	−.039 (.810)	.161 (.769)	.098 (.769)	.042 (.744)	270
Aグループ	.064 (.833)	−.141 (.768)	.153 (.841)	.101 (.767)	.055 (.727)	−.029 (.755)	129
Bグループ	−.022 (.860)	−.103 (.734)	−.005 (.891)	−.084 (.756)	−.053 (.785)	−.040 (.743)	177
Cグループ	−.049 (.898)	.200 (.802)	−.112 (.794)	.025 (.785)	.033 (.799)	.031 (.754)	240

次に、それらの結果に、因子分析（バリマックス法）を適用した。析出された6つの因子および学校別因子得点は表6、表7のとおりである。各因子の特徴は表6を見られたい。

学校階層上の地位別に教師のパースペクティブの特徴をみると図12のようになる。学校階層上の地位が最も高いAグループの教師は、私語居眠り等の授業中の逸脱を問題視する一方で、生徒の従順性も問題視し、脱生徒役割をとる生徒を好ましいとみる傾向が顕著である。学習に関わる授業中の態度を重視するに

図12. 学校階層上の地位別因子得点



NII-Electronic Library Service

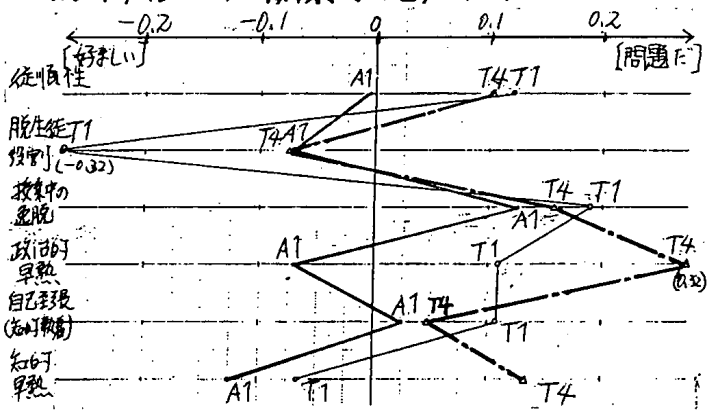
The Japan Society of Educational Sociology

とどまらず、「校則に違反することがあっても生活力が旺盛」といった生徒役割の枠を超えた生徒も肯定的に評価するのである。Bグループの教師もまた、Aグループの教師と同様、脱生徒役割を好ましいとみる。しかし、同時に、「おとなしい」「校則違反をしない」等の従順性については問題視せず、むしろ好ましいと見ている。生徒に対するややアンビバレントなパースペクティブを示している。Cグループの教師のパースペクティブは、Aグループときわめて対照的である。授業中の逸脱に対しては寛容であるが、校則違反、学校からはみ出すといった脱生徒役割に対しては問題視する傾向がきわめて大きく、従順性を好ましいとみる程度もグループ中最も高くなっている。

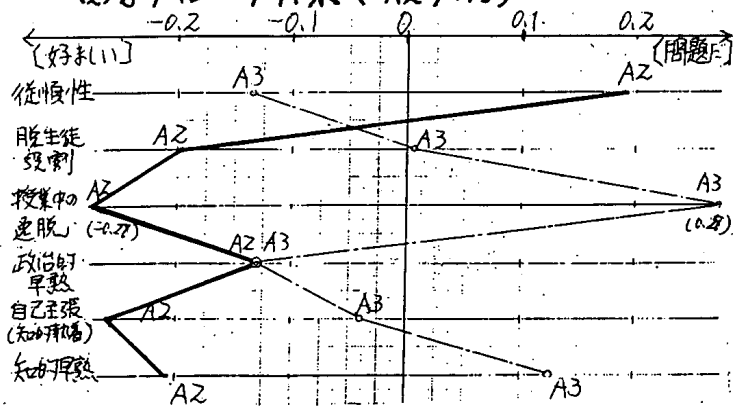
次に、学校階層上の地位、県をコントロールし、同一グループ内での教師のパースペクティブの特徴を比較したのが図13(1)〜(5)である。同一の学校階層グループ中でも、個々の学校毎に顕著に異なるパターンをとっているのが注目される。教師のパースペクティブは学校階層上の地位と一対一対応しているわけではないのである。教師のパースペクティブにおけるこうした学校の個別性が、学校経営(学習と行動の組織)、生徒文化といかなる関連をもっているのか。この点についての検討は、学校経営のデータを交え、当日発表することとする。

図13. 学校別因子得点

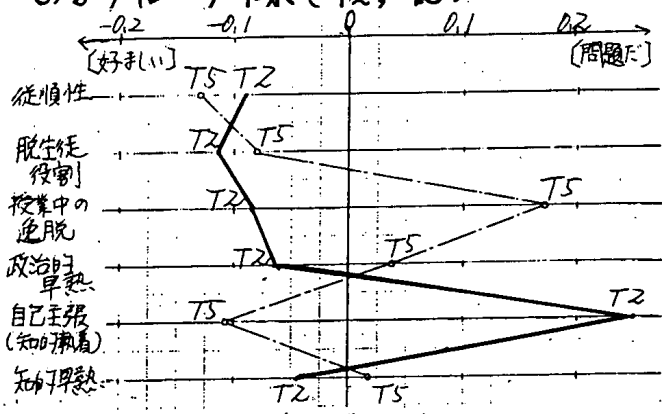
(1) Aグループ・T,A県 (A1, T1, T4)



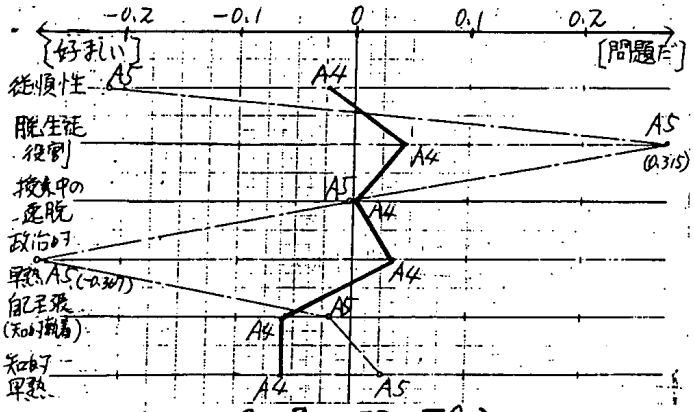
(2) Bグループ・A県 (A2, A3)



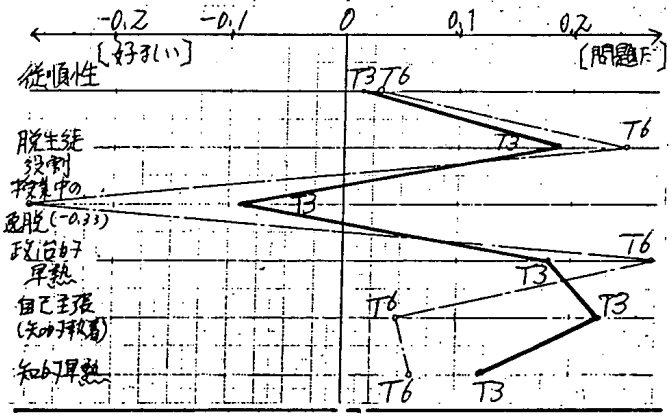
(3) Bグループ・T県 (T2, T5)



(4) Cグループ・A県 (A4, A5)



(5) Cグループ・T県 (T3, T6)



(学校経営関係のデータは、当日配布する。)

NII-Electronic Library Service